

育苗 種を蒔き、苗を育てる

田んぼアートの制作に欠かせないのが県立岩瀬農業高等学校の生徒たちの協力です。育苗作業は、生物生産科の生徒の皆さんにご協力いただきました。

手作業で行う種まき作業

この種まき作業が、秋の稲刈りまで続く「かがみいし田んぼアート」の幕開けとなります。

種まき作業は、岩瀬農業高校の生物生産科の生徒9名と先生2名により、4月26日(火)に校内の作業場で行われました。

まずは育苗箱(縦600mm×横300mm×高さ30mm)に床土を入れる作業です。育苗箱をベルトコンベア式の播種機にセットすると、育苗箱が自動で播種機の中を通り、土が入った状態で反対側から出てきます。慣れれば簡単な作業です。

土を入れる作業が終わると種まき作業が始まります。通常であれば播種機でできる作業ですが、様々な色の種が混

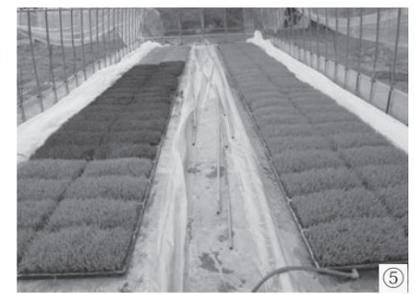
ざらないよう、種まきは手作業で行います。生徒たちは均等になるよう注意を払いながら、慎重に作業を行っていました。黒30枚、赤15枚など、合計120枚の育苗箱に種を蒔きました。

成功の命運を握る育苗作業

この育苗できちんと苗が育つか、田んぼアート成功の分かれ目となります。

種まき作業で完成した育苗箱をビニールハウスに並べ、上からシートを被せて保温し、発芽の待ちます。発芽し1cm程になったらシートを外し、水やりをしながら成長を見守ります。

種まきから約10日、苗も3〜4cm程となり、この時点でそれぞれの色の違いがわかってきます。田植えに向けて、苗の準備は万全です。



- ① 播種機に育苗箱を入れます
- ② 蒔かれた種です
- ③ 真剣に種を蒔く生徒たち
- ④ ビニールシートで保温します
- ⑤ 苗はしっかり成長しました

INTERVIEW

田んぼアートに携わったことは誇りです



▲育苗を担当した生物生産科の生徒達

育苗は田んぼアートを作る上で重要な作業なので、責任感を持って作業しました。普段は機械で種まきをするので、手作業での種まきはとても新鮮でした。種どうしが被らないよう、隅々まで万遍なく行きわたるように蒔くことにも神経を使いました。無事に芽が出たときにほっとしたのを覚えています。

自分たちが育てた苗で田んぼアートが出来ていると思うと誇らしく感じます。田植えにも参加したので、成長した田んぼアートを眺めるのがとても待ち遠しいです。



岩瀬農業高等学校 生物生産科 3年 鈴木翔太さん

測量

植える場所を決める

環境工学科の生徒の皆さんの協力により測量作業を実施しました。



座標の数は2,200点

田んぼアートの絵柄を決める、最も重要な作業が測量です。絵柄をかたどるように杭を打ち、その杭を色つきのビニールテープで囲むことで、苗を植える場所を決めていきます。例えば、白苗を植えるところは白いビニールテープ、黒苗を植えるところは紫のビニールテープで囲います。

では、杭を打つ場所はどうやって決めていくのでしょうか。杭打ちの場所を決めるには、トータルステーションという測定機器と、メジャーを使用します。トータルステーションで左右の角度と高さを、メジャーを使って距離を測ります。左右の角度、高さ、距離により正確な1点を導き出し、そこに杭を打ちます。予定と違う場所に打ってしまったら、全然違う絵柄になってしまうため、正確さが必要とされます。1本1本丁寧に打たれ、今年は合計2,200本もの杭が打たれました。時間と手間のかかる、とても大変な作業です。

- ① 左右の角度と高さを測るトータルステーション係(左手前)、メジャーで距離を測る距離係(中央手前)、トータルステーション係の指示に従い杭を打つ杭打ち係(中央奥)
- ② 指示を出すトータルステーション係と距離係(横から)
- ③ 杭打ち係
- ④ 先生から杭を受け取る杭打ち係の生徒。ぬかるむ田んぼは歩くのも大変そうです
- ⑤ 杭にビニールテープを巻いた様子

